



180号

2013/ 1 /1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://wanli-san.com/>

Eメール: [wanli@jcom.home.ne.jp](mailto:wanli@jcom.home.ne.jp)

◆‘わんりい’ HPのアドレスが上記になりました。

## 新年明けましておめでとうございます。



雪にも負けず

2008年秋撮影/雲南省デチェン・チベット族自治州シャングリラ県建塘鎮

### ‘わんりい’ 180号の主な目次

北京雑感(71)別荘 .....	2
私の調べた諺・慣用句(16)「雨垂れ 石を穿つ」 .....	3
媛媛讲故事(50)「奇妙な壺」 .....	4
【智子の雑記帳】89「来る年への願い」 .....	6
中国-城市めぐり(21)「青島市・そのI」 .....	7
「四姑娘山・写真だより」の里を訪ねて⑥日隆へ .....	10
モンゴル滞在日記 IV .....	12
スリランカ紹介(64)「スリランカ人は水浴びが大好き」 .....	14
松本杏花さんの俳句集「千里同風」より .....	15
私の四川省ひとり旅(61)/4度目の康定で IV .....	16
【活動報告】平成24年度「つながりひろがる」 .....	18
留学生スピーチ/鐘嘉慶、A.クランベコフ、王天陸、劉嘉琦 .....	18~21
「つながりひろがる」(12/2)のアンケート集計結果 .....	21
【活動報告】留学生達と料理交流 .....	21
「中国の笑い話⑥」/会員短信 .....	22
‘わんりい’ 掲示板 .....	22

### 【写真説明】

日本雲南聯誼協会は雲南省山岳地域の少数民族を対象に、小学校建設を柱とした教育支援活動を行っています。2007年には支援小学校の子どもたちに使いきりカメラを渡し、「目に映るありのままの日常」を切り取ってもらおうという「小さなカメラマン」プロジェクトを立ち上げました。初めてカメラを持った少数民族の子どもたちが自由な感性で撮った、世界にふたつとない作品です。

昨年11月初旬、町田市薬師公園・フォトサロンで展示した写真の中から3枚を選んで‘わんりい’会報・新年号、3月号、4月号の表紙で紹介します。

認定NPO法人日本雲南聯誼協会

東京都新宿区市谷左内町21-13-1階

☎03-5206-5260 FAX03-5206-5261

HP:<http://www.jyfa.org>

Facebook: <http://www.facebook.com/NPO.JYFA>

ご存知のように、北京は大きな都市です。以前、清王朝皇帝の避暑山荘で有名な、承德へ出かけた時、車で峠をいくつも越えて3時間近く走った山の中で、「この辺りは何処ですか?」と聞いたら、「まだ北京市内だ」との答えが返ってきて、ビックリしたことがあります。後で地図を調べると、北京市密雲県を走っていたようです。

北京市には、区が13と、県が2つあります。密雲県は、延慶県と共に、北京市内にある県の一つです。真ん中に、北京市民の飲料水を賄う人造の密雲水庫(貯水池)があります。因みに、中国語でダムは、水坝(shuiba・シュイバ)と水庫(shuiku・シュイク)と二つありますが、水坝は発電用ダム、水庫は貯水用ダムと区別するのだそうです。密雲県のは水庫です。ドライブの途中、車を路肩に止めてもらって、木々の間から覗いただけですが、本当に大きな湖が見えました。山間を堰き止めて水を貯めたそうで、不規則な水辺の線がその話を、いかにもと納得させてくれました。

この密雲県、北京市市街地より北にあるので、夏涼しいのは当然ですが、聞くところによると、冬も意外に過ごし易いのだそうです。それで、市街地に住んでいる人が、親のために住宅を買って、別荘(別墅ビエシュ)としているケースが多いようです。老人達には保姆(バオムー=保母)と一緒に生活して、身の回りの世話をします。保母と言うと、日本では子供の世話をする人というイメージですが、北京の人たちは、多く「家政婦さん」という意味で使います。

この地域の別荘は、かなり昔から、地域に溶け込んだ形で、快適に生活している人々が多いようで、まあ、歴史のある別荘地です。私の友人のご親戚で、今では90歳を超えた方も、密雲県で、長年一緒に保母と、のんびりと暮らしているそうです。

密雲県のような昔ながらの別荘地の他に、最近、と言っても5,6年前からですが、もっと近く、都心から1時間半位のところで、しきりに別荘地を売り出すようになりました。あちこちで造成していましたが、私が見学したのは、昌平区小湯山の近くの幾つかの別荘地でした。小湯山と言っても山ではありません。平坦な広い道路の両側にありました。

日本の別荘地は、高原や山地が多く、地形に沿って曲がると新しい別荘地が始まることが多いですが、平地に隣り合って違う会社の別荘地が並ぶことは考え

難いですね。若しあったとしたら、宅地分譲のようで、別荘地の雰囲気は損なわれるでしょう。

でもここは中国ですから、平地に並んでいると言っても、日本とは様子が違います。先ず、このまっすぐな道路が、片側3車線近くある(中央区分線はありません)のですが、車線を分ける白線は引いてありません)のですが歩道はありません。道路の端から浅くて幅が広い窪地が続き、向こう側にブッシュがあります。そのブッシュの後ろから丈の高い木が鬱蒼と繁り、奥に何があるか分かりません。

そんな景色を見ながら10分ほど走ると道路から直角に入る道があります。そこを曲がって500m程入ると、ガードマンのいる門があります。

門を入るとすぐに駐車場と、会社の販売事務所があります。別荘地の分譲は、一般に区分けした土地にコンクリート打ち放しの家を建てて売られます。それで人々は、区画の場所と、そこに建つ家の組み合わせを選んで買わなければなりません。外装・内装は自分たちでやります。建物の強度に影響の無い範囲で、柱や壁をはずしてしまうことも出来ますが、家の向きや地下室の有無などどうしても変えられない所もありますから、選ぶ時は大変です。分譲の区画は、分譲地のグレードにもよりますが、最小でも100坪、平均すると200坪以上あるようです。

希望の区画を見に行く時は、販売事務所から会社の電気自動車で連れて行かれます。大きな分譲地になると、何次にも分けて売り出しますので、初めに売り出した区画には、家が完成して、人が住んでいたりします。その一方で、未だ造成中だったり、区割りし終わった所で、家を建てていたり状況はバラエティーに富んでいます。

次の分譲地へ行くには、また同じ道路に出て、20分程走ると同じような入り口があります。販売方法は同じですが、中の雰囲気はそれぞれ大分違います。規模は同じようになりかなり大きいのに、どちらにいても隣にそんな大規模な分譲地があるとは感じられないのです。勿論、道路を走っている限り、絶対に中の様子など分かりません。こんな時、中国の国土の大きさを実感します。しかし、そんな大きな中国でも、土地(使用権)の分譲は制限する方針なので、土地付き別荘が人気なのだそうです。

私の調べた諺・慣用句 16  
雨垂れ石を穿つ

三澤  
統

日常よく使われる慣用句で、毎日少しずつでも根気よく続ければ最後には大きな結果をもたらすことができることを表すものがいくつかあります。“チリも積もれば山となる”“千里の道も一歩から”“雨垂れ石を穿つ”などがお馴染みかと思います。いずれも言い得て妙かと思いますが、今回はこれらの中から“雨垂れ石を穿つ”を調べてみることにしました。

辞書には次のように載っています。

▲三省堂 現代国語：

「雨垂れ石をうがつ 雨垂れが長い間には石に穴をあけるよ

うに小さな力でもこつこつとたゆまず努力すれば、最後には大きな成功をおさめることができる。点滴石をうがつ」

▲小学館中日辞典：

「水滴石穿 shuǐ dī shí chuān 雨垂れ石をうがつ。根気よくたゆまずに努力すれば必ず事を成し遂げることができるたとえ」

この成語の出自は、宋代の羅大経の「鶴林玉露<sup>注</sup>・一錢斬吏」の次の部分です。

“一日一钱，千日千钱，绳锯木断，水滴石穿”

「一日一錢（ずつ貯めると）千日で千錢（にもなる）。（何回も繰り返せば）縄でも木を切断できるし、水滴も石を穿つ」

昔、北宋に名を張泳<sup>あきな</sup>、字を復之、号を乖崖という大臣が居り、かつては崇陽<sup>しゅうよう</sup>県の県令を務めていました。その当時の社会は大変荒れていて、軍隊では一介の兵士が將軍を凌辱したり、役所では小役人が長官に逆らったりという、非常に悪い気風が蔓延していました。張乖崖はこのような気風に非常に憤慨し、いつか機会を捉えてこの種の行為を徹底的に懲らしめてやろうと固く心に決めていました。

ある日彼が役所の入り口附近を巡視していると、突然一人の小役人が大慌てで、役所の財物貯蔵庫から逃げ出してくるのを目撃しました。張乖崖が大声で

呼び止めると、その小役人は頭巾のなかに一枚の銅錢を素早く隠したのです。すぐさま小役人を捕らえて、「お前は蔵の中から銅錢を盗みだしたであろう」と尋問すると、始めは否定していましたが、張乖崖の執拗な追及にあい、遂には銅錢を盗みだしたことを白状しました。

張乖崖は小役人を裁きの間に引き連れてきて、係りの者に拷問を命じました。すると小役人はそれが不服でかんかんに怒って言いました。「たかがたった一枚の銅錢を盗んだことが何だというのだ。それをこんな拷問をして、俺をどうしようと思っているのだ。もしや俺を殺そうというのか？ えっ!? どうなんだ！」

張乖崖は意外にもこの小役人が自分にはむかってくるのを見て、怒り心頭に発し、即座に判決文をしたためました。

「一日に一枚の銅錢を盗めば、千日では一千枚の銅錢である。何回も繰り返すなら、縄でも丸太を切断できるし、水滴でも石を穿つことができる。ゆえに一日に一錢ずつ銅錢を盗むことは大罪に相当する」

と、判決文を書き終えるや、張乖崖は乱暴に筆を投げ捨て、直ちに刀を手にして檀上から駆け下りて、自ら小役人を切り捨てました。

お話は以上です。

判決文の内容がいささか屁理屈めいているようにも感じますが、それだけ張乖崖が当時の悪い気風に腹を立てていて、この小役人の反抗的な態度が逆鱗に触れ、見せしめにしたのでしょうか。

又、もうお気づきかと思いますが今回紹介しました話では、現在私たちが使う“雨垂れ石を穿つ”とはニュアンスが違ってきます。たしかに少しずつでも繰り返せば後に大きな結果が出るということを述べていますが、悪い意味の“大それた結果”という意味合いになっています。現代では良い意味の“大事を成し遂げる”という意味合いで使われていると思います。

〈注記〉

かくりんぎょく 鶴林玉露<sup>らたいけい</sup>：中国の随筆集。南宋の羅大経著。1248～52年成立。天・地・人の3部からなり、詩や文学の批評を中心に逸話・見聞を収録。

(デジタル大辞泉より)

昔、河南省の汝南郡に、市場を管理している費長房という役人が居ました。或る時、市場の誰もが知らない、いかにも遠方から来たらしい老人が市場にやって来て薬を売るようになりました。薬の値段は高価な上、値段の交渉も出来ませんでした。しかし、薬はとても効き目があり、どんな難病にもよく効いて治すことができる評判になりました。

男はいつも壺一つを持っているので、皆から「壺公」と呼ばれていましたが、壺公の商売は瞬く間に繁盛するようになり、一日に数万銭(数十両白銀に相当)<sup>註)</sup>を儲けることができるほどでした。しかし、老人は自分には僅かしか残さず儲けの殆どは町の貧乏人に与えてしまいました。

費長房は、ある時から壺公の奇妙な生活に気付きました。壺公の壺は、日中はいつも家の軒に掛けてありますが、夜になると壺公は体を小さく縮めて壺の中へ飛び込み、その中で休んでいるのです。そんな訳で「壺公はきっとただの人間ではない」と費長房は思いました。そして、費長房は壺公の売り場を毎日奇麗に掃除し、時には食べ物を持参し壺公に食べて貰ったりしました。壺公はその都度あまり遠慮もせず受け取るのです。こうして、費長房が壺公からの見返りは何も求めることなくひたすら親切に接していたある日、壺公が言いました。

「今日、日が暮れて人気がなくなったら、ここに来なされ」

その日の夕暮れに、費長房が壺公のところに行くと壺公が言いました。

「わしが壺に入るところをご覧になったのじゃね？」

費長房はちょっと吃驚して

「え!? あ、そ、そうです。でもどうしてそれがわかったのですか？」

「いや、わしは何でも見通すことができるのじゃよ。だが壺に入るのは簡単なことだ。お前さまもわしを真似ればできるのじゃよ」

費長房はさらに目を丸くして

「ええっ! そんなことが出来る筈などないでしょう？」

「いや、できるのじゃよ。わしのように壺に向かって跳んで見てごらん」

費長房は半信半疑で言われた通りに跳んでみますと、まったく気が付かないうちに、壺に入ってしまった。

壺の中は、美しい世界が広がっていました。まるで宮殿のような屋敷、高く聳える楼閣、そして幾重もの立派な大門が連なっています。長い、曲がりくねった廊下には、数十人もの侍者がずらりと佇んでいつでも用があれば応えようとしているかのようです。費長房が驚き呆れてぼんやりしていると、壺公がそばで話し始めました。

「実は、わしは仙人なのじゃよ。昔、天界にある役所で勤めていたが、或る時、遊びにはまって仕事をさぼってしまった。それで罰を受けて、人間界におとされたのだが、長くここに留まっている間にお前さまが良い人間だと感銘し、仙術を教えても良いかもしれないと思ってわしの秘密を見せたのじゃわい」

費長房は、それを聞くとすぐうやうやしく跪いて、頭を地面打ち付けて言いました。

「この私めは何も知らずあなた様に無知の罪を幾度も犯し失礼を重ねました。しかし、幸いにもお見捨てなく、さらにご厚情を下さいますとのこと深く感謝申し上げます。私は大変愚鈍な人間ですので、あなた様のご厚情に応えられないかもしれませんが、友として遇して頂ければこの上もない光栄に思います」

壺公は費長房の言葉に続けて言いました。

「そのような気持ちを持たれるのは結構なことだ。ただわしが話したことを決して人に言わないで欲しいがの」

費長房は強く頷いて承知しました。

それからしばらく後、壺公が建物の二階にある市場の事務所へ費長房を訪ねてきました。

「いっしょに酒を飲まないか。わしは少しばかり酒を持ってきたぞ。下の階に置いてあるがの」

「それは、嬉しいです。では、誰かに運んで貰いましょう」

費長房は市場の雑役夫たちに命じました。が、なか

なか運んで来ません。様子を見に行ってみますと、酒の容器は見た目には小さいのに重くて誰も持ち上げる事が出来ません。費長房は不思議に思いながら壺公に訊きました。

「申し訳ございません。お酒が重くてどうしても運べない様子です。どうしたら良いでしょうか」

壺公は笑いながら下におりると、指一本で酒の入った容器を運び上げ、二人で飲み始めました。ところが、拳大のコップ一杯の酒は、いくら飲んでも中身は全く減りませんでした。

二人は、お酒を飲みながらよもやまの話をあれこれした後、壺公が言いました。

「わしは間もなく人間界を去ることになった。お前さまはわしについてくる気持ちがあるのか？」

「勿論行きたいのですが、家族にどう言ったらいいのでしょうか。仙界に行くことは秘密にしなければいけないのではありませんか？」

「そんなことは易しいことじゃよ。」

壺公は一本の青い竹の竿を費長房に渡して言いました。

「この竹の竿を持って家へ帰りなさい。家族には病気になるって、この竹の竿を自分の寝床に横たえ、布団を被せておくと良い。それから黙って家を出なされ」

費長房は壺公の言われた通りにしました。

費長房が家を離れた後、家族は寝床に横たわった費長房の遺体を見つけました。家族は費長房が死んだと思い、泣いて葬式を行い埋葬しました。

費長房が壺公のところに戻ると、間もなく意識が遠のいてゆきました。そして再び意識が戻って気が付いてみると見知らないところを壺公の後について歩いていました。

そのまま壺公に連れられて歩き続けていますと、突然目の前に虎の群れが現れました。壺公は虎の群れを離れ、費長房だけが取り残されてしまいました。虎は牙をむきだし、口を大きく開き、今にも費長房に噛みつこうとしましたが、彼は不思議と少しも怖くなかったのです。

翌日、費長房は石の洞窟に入れられました。頭の上には大きな岩が茅で編んだ縄でつり下げられています。そればかりではありません。見上げると沢山の蛇が縄にくるくる巻き付いて、縄を噛み、縄は今にも切

れてその岩が頭の上に落ちて来そうです。しかし、費長房は何故か落ち着いていられました。

壺公は費長房のところにやって来ると費長房の肩を撫でて

「お前は立派な男じゃ。仙術を教える甲斐が有るのう」

と言いました。

続けて壺公は費長房に糞や蛆を食べさせようとしてました。しかし、その悪臭に費長房の顔はこわばりとても口にすることができません。その様子を見た壺公は深いため息をして言いました。

「お前さまはやはり仙人になるのは難しいようじゃなあ。では、お前さまを地上に戻し、仙人になる代わりとして数百歳の寿命を与えようかの」

壺公は呪語を書いた一巻の護符を費長房に渡し

「これをしっかり身に付けおきなされば、鬼や悪霊を思うままに操ることができる上、どんな病気をも治すことができるのじゃ。災難から逃れることもできるというものじゃよ」

と言って、費長房を地上に帰らせることにしました。

しかし、費長房は自分が既に死んだと家族に思われている筈なので、もう帰れないのだと心配しました。すると、壺公は一本の竹の竿を出し言いました。

「これに乗って帰るとよい、なにも心配することはないぞ」

費長房は仙人になることに未練もあり、壺公と別れるのもつらく立ち去りがたい気持ちでした。しかし結局は、戻るしかないと覚悟を決めて、竹の竿に跨り壺公に別れを告げました。すると一瞬、眠気を感じたようでしたが、気が付くともう自宅の庭に立っていました。

費長房が庭に立っている姿をみた家族は幽霊が現れたかと思い大変吃驚しました。

費長房は

「私は幽霊じゃない。怖がらなくてよい」

と言って、自分に起こった一切を家族に詳しく話しました。しかし、家族はまだ半信半疑で、墓を掘って棺桶を開けてみますと中には竹竿が一本あるだけでした。

費長房はたった一日しか経っていないと思ったのですが、家族の話では既に一年経っていると言います。

その後、費長房は壺公から貰い受けた護符を使っ

て、病気を治したり、鬼を退治したりし、護符の効力は壺公が告げた通りでした。

その頃、費長房が住んでいるあたりには、妖怪がよく現れていました。妖怪は人間の姿で偉そうに馬の群れを従えてやって来、太鼓を鳴らしたりしながらあちこち歩き回り、府庁にまで入って騒ぐので人々は大変悩んでいました。

ある日、費長房は用事で府庁に行くと、ちょうど妖怪が府庁に現れて騒いでいました。

「こら、そこに居る鬼め、おとなしくしろ！」

と費長房が怒鳴りつけると、妖怪は慌てて馬から降り費長房の前へ出てひれ伏しました。

「このおいぼれ鬼め！ 大勢の従者を使って府庁を襲い、人々を驚かせ、町中を騒がせるとはどういうことだ！ 死罪に当たるぞ！ 今すぐ正体を明かせ！」

すると妖怪は忽ち車輪ほどもある大きなスッポンに変わりました。費長房はその妖怪を人間の姿に戻すと、体に一枚の護符を貼付けました。妖怪は結局首を樹に縛り付けた状態で死んでしまい、町は再び穏やかな日々を迎えることができるようになりました。

或る時は、東海地方で三年間も雨が降らなかったと聞き、費長房は雨乞いに行きました。ちょっとした技で東海を治めている神を操って雨を降らせました。

一方、費長房は地脈を縮めたり、伸ばしたりすることも出来るので、千里先にあるものをすぐさま目の前に呼び寄せたり、目のものを忽ち彼方へ送ることができたと伝えられています。話によると、費長房は二百歳ぐらいまで生きていたということです。(終り)

#### ■註

10,000 銭 = 1 両白銀 = 現在の 2,000 人民元

## 智子の雑記帳 89

### 来る年への願い

マヤ文明の予言で2012年12月21日に世界は滅亡していたらしい。ちなみに今日は12月22日(原稿の締め切り、過ぎています、すみません)、世界は前の日と変わらずに続いている。

以前もそんなことがあったと思ったら、ノストラダムの大予言だった。小学生のときに、本で知って、妙に盛り上がった。空から恐怖の大王が降ってくると予言された1999年は過ぎ、世界は21世紀を迎えた。

世界はそう簡単に滅亡しない。世界の不正も不条理も問題も簡単には、なくなる。たくさんのおもちゃを抱えて地球はまわり続ける。

それでも世界がおわるかも、と2011年3月の福島第一原発事故のとき、私は思った。たくさんのおもちゃある方々のおかげで、世界は続いている。やはりたくさんのおもちゃを抱えながら。日本は小さい国だ。にもかかわらず経済大国になれたのは、こんな危険と隣り合わせで、無理して頑張ってきたからなのだと、事故の日

に初めて知った。現在、原発の立地条件の見直しが行われているが、活断層の可能性に目を閉ざして原発を作り続けた日本を、お金を稼ぐために、自分の体調を無視して無理に働き続けた姿と言ったら美化しすぎだろうか。

世界は簡単には滅亡しない。だからこそ、私たちは世界の抱える数多くの問題とずっと、根気よく付き合っていかなければならない。世界がよりよくなるために、小さなことでもいいから、自分ができることを、考えて生きていかなければならない。(例えば、選挙のときに投票に必ず行くことも、自分ができる小さなひとつだと思う。)

2012年の「今年の漢字」は「金」だった。2012年はオリンピックあり、ノーベル賞の受賞があり、素敵な話題に癒された。

年が明けて、2013年、いいことが多い1年でありますように。毎年のことながら、願わずにはられない。(真中智子)

青島市と言えば誰しも思い浮かべるのは、「青島ビール」と「ドイツ」ではなからうか。しかし青島市の歴史と市域の広さを見ると、これらは青島のほんの一部を表しているに過ぎないことがわかる。

まず市域であるが、10,654km<sup>2</sup>と想像できないくらい広い。日本との比較では、都道府県の中で7番目に広い岐阜県(10,621km<sup>2</sup>)がほぼこの面積に相当する。市では比較のしようがない。中国は日本の約26倍の面積なので驚くにはあたらないかもしれない。

現在我々が観光する青島市は、主としてドイツが租借した膠州湾を取り囲むように置かれた7つの区部だけと言っても過言ではない。区部の総面積は1,102km<sup>2</sup>で市全体の約10%である。青島市には傘下に5つの市(県級市)があり、その面積のほうが圧倒的に広いわけである。また歴史を見ると、その昔は後述する「瑯琊」と「即墨」が青島市の中心ともいえる場所であり、今の海に面している区部の歴史は百数十年にしかない。

昨年(2012年)夏の昼過ぎ、私は青島流亭国際空港に降り立った。青島は2008年に来て以来である。手荷物カウンターでトランクを受け取り、外に出ると年配の中国人女性が寄ってきて、「日本人か。どこに行くのか」と聞くので市内だというと、「100円でいいからうちのタクシーに乗ってくれ」という。OKすると少し離れたところに連れて行かれた。5分くらいしてタクシーが1台来てそばに止まった。見るとすでにお客が2人乗っている。日本ではあまり考えられないが、中国ではよくあることである。走り出してしばらくすると、給油するからガソリンスタンドによるという。これはさすがに日本では考えられない。空港は市内からかなり離れており、1時間かかったが無事ホテル前で止まった。

青島山芋<sup>shān fú</sup>大酒店という海沿いにある4ツ星ホテルである。市内地図を見るとこのホテルから、北京オリンピックのヨット会場であった記念公園が近いことがわかり、カメラ片手に歩いて行った。入り口に大きな立体文字で作られた「青島オリンピック帆船中心」が置かれている。いかにも目立ちたがり屋の中国らしい演出だなと思った。そして、「そうか、ヨットは中国語では



青島オリンピック記念公の入り口に置かれた、立体文字の記念モニュメント



海岸線に沿って係留されている無数のヨット

帆船というのだ」とここで初めて知った。

公園内に入ると、右手に伸びる海岸線に沿って無数のヨットが係留されている。壮観である。海洋都市という感じがする。奥のほうに当時のオリンピックの展示館があったが入らなかった。全体的に遊園地のように、親子づれにはいいところだ。

ホテルで少しゆったりしようと思つくと、フロントのあたりに「啤酒節(ビールまつり)」のポスターが掲げられている。訊ねると、ここから東へタクシーで15分のところにある「青島国際啤酒城」でビール祭りを開催中だということ。さすがに中国のビール発祥の地だけのことはある。青島ビールの工場と博物館には2008年の時見学したので、ここのビール祭りはどんなものかと思いタクシーに乗った。大連では毎年8月に大規模なビール祭りがあり、大盛況なのである。星海広場という中国国内でも一二を争う広さの会場で、約2週間に渡って開催されるのだ。啤酒城に着くと入り口に

「第22届青島国際啤酒節」と書いたアーチがかかっていた。大連のビール祭りは昨年が14回目のはずだが、やはり青島市の方が歴史が長い。

このあたりで膠州湾周辺(区部)の歴史を簡単に振り返ってみたい。青島が近代化に向けてすこしずつ形を整えるのは、19世紀後半に中央の役所の分局が置かれ始めてからという。1891年に清政府が国防上の観点から、ようやく膠州湾口からすぐの青島湾内に軍需物資の供給のための棧橋を造った。この棧橋がのちのち青島市の代名詞的存在になっていくのである。

さてドイツが山東半島に足場を築くのは、日清戦争後である。つまり日本に対して仏、独、露の三国が行った三国干渉(1895年)においてである。そのうちドイツは1898年に山東省で発生したドイツ人宣教師殺害を口実に膠州湾を99年間の租借地とした。ところがその後勃発した第一次世界大戦で、連合国側に付いた日本がドイツに宣戦布告し、同湾にあるドイツ要塞を1914年に陥落させている。

その後、日本の中国に対する過酷な21か条要求とそれに対する中国国内の抗日の五・四運動が起こる中で、日本の大陸進出を阻もうとした米・英両国の圧力により、取得したドイツの権益は1922年に日本は中国に返還している。1997年までイギリスに99年間租借されつづけた香港と対照的である。抗英の五・四運動はなかったのであろうか。

ドイツは16年間青島を占領したわけであるが、その間日本が満州国時代に長春などに理想的な街づくりを行ったように、この地をモデル植民地とすべく欧州風の街並みを整えていった。その当時の雰囲気は後述する八大関景区や天主教堂や総督府旧址などここに名残がある。また有名な「青島ビール」は1903年にドイツの投資家が、故国のビール醸造技術を導入してビール製造を始めた。これは租借地経営の一環としての産業振興策であったようだ。

ところが第一次大戦後のベルサイユ条約(1919年)で日本はドイツの諸権益を引き継ぐことを認められ、青島ビールも日本の大日本麦酒が経営を引き継いだ。前述のように1922年に山東半島の権益を中国(中華民国)に返還したが、青島ビールの経営のみ大日本麦酒が継続して行った。それも1945年の第二次世界大戦の敗戦で青島ビールは中国に接収され、以降今日に

至っている。

中国で一番有名な青島ビールは今でも中国各地で生産され、中国最大の生産量を誇っている。この青島ビールのラベルのデザインを機会があれば見ていただきたい。ロゴはさきほど述べた青島湾の棧橋の先端に建てられた八角二層の「回瀾閣」である。二階に上がると旧市街と美しい海を望むことができる。青島七景の第一に挙げられているようだ。確かに夕日が沈むシーンを思い浮かべれば一幅の絵のようである。棧橋は石造りで幅10メートル、長さは約400メートルと湾の中央部から沖合に向けて突き出ている。ここには両側にびっしりと土産物店が朝から夜遅くまで営業している。棧橋からの夜景も美しく、一日中賑わっている。青島市を初めて観光される方はまずこの棧橋をおすすめしたい。

ビール祭りに話を戻すと——啤酒城のアーチをくぐると、テント式の簡易な建物がズラリと並んでいる。建物ごとに各国のビールの看板を掲げ、色とりどりのネオンサインで煌びやかに装飾している。夕暮れ時であったが大勢の人が会場を埋めていた。外から中を伺うと舞台が設えてあり、そこで歌ったり踊ったりしている。ともかくどの建物からもボリュームをいっぱいあげた音楽が迫ってくる。長テーブルがいくつも並べられその間をビール瓶や料理を持った従業員が走り回っている。

おそらくいつもの冷やしていないビールだろうな、と思いつつ立ち止まって見た。私のようにあまりアルコールを嗜まない者でも、ビールは冷たいのがおいしい。ともかくビール祭りは、活気に満ち溢れているが、年のせいかやかましいだけで、ちょっとついていけない。大連ほどの規模ではないがそれでも奥の方まで会場が続いてなかなかの祭りである。多くは若者で年配者は少ない。若者のストレスとエネルギーの発散の場に見える。

中国はどこに行っても騒々しい印象が強い。タクシーに乗れば大きな音でラジオの音楽をつけている車が多い。何度か「軽一点儿」と言って、ボリュームを下げてもらったものだ。どこの観光地に行っても音楽が流れている。静かに何かをしようという雰囲気の場合とかイベントは、どの都市に行ってもあまりお目にかかったことがない。

そうした中で、「八大関景区」はとても静かな住宅街で、ゆったりと散歩できた。別世界のような静けさであった。八大関景区とは、嘉峪関(甘肅省)路、山海関(河北省)路、正陽関(安徽省)路、など中国の八か所の関所から名付けられた8本の通りがあったことから、この周辺をそのように呼ぶようになった。ここは、1930年代に駐在していた各国の官僚や資本家が趣向をこらして建てた別荘群であるが、今でもその多くが保存されている。2002年には「国家文化財」に認定されたそうだ。

この中で最も有名なのは、ロシア人が設計・建築した「花石楼」であろう。花崗岩を使用した重厚な建物はとにかくすばらしい。多くの要人が利用したそうだが、蒋介石も別荘として利用していたという歴史的な建造物である。デンマーク様式で建てられたという、尖がり屋根に壁面が濃いブルーのメルヘンチックな「公主楼」にも行ったが、残念ながら中には入れなかった。公主楼はデンマークの公主(王女)が避暑に来た時のために造ったそうだが、実際には公主は来なかったらしい。デンマークと中国は当時いかなる関係であったのだろう。

近年の中国はどんな地方都市に行っても、マンションや高層の商業施設ばかり目につく。従って、このように閑静な場所にある広い庭付きの戸建て住宅群は貴重である。ドイツ統治時代の雰囲気は十分残っている。

ここから西にすこし行ったところに「康有為故居」がある。康有為はご存じの通り歴史上の人物であり、ここでは簡単な紹介にとどめたい。私が彼の故居を是非見たいと思ったのは、彼は1858年に広東省で生を受け、その後は北京の紫禁城を中心に活躍したのに、なぜ青島に私邸があり、お墓まであるのかということである。

彼は清末から民国初期にかけての政治家・思想家であり、また書家でもある。傾きかけた清国の改革に乗り出したとき、西太后に光緒帝ともどもつぶされ、彼は命からがら日本に亡命した。日本人女性を妻とし、日本の要人にも多くの知己を得るなど日本との縁も浅からぬものがある。1911年に辛亥革命が起き、翌年には清朝は滅亡し彼はようやく故国に戻ることができた。清朝再興への思いが強く、皇帝を戴く立憲君主制を主張したが時勢は急展開をみせ、もはや彼の主張は



康有為故居の書齋

古い考え方として急速に支持を失っていった。

年齢も60歳に近かったと思うが、その後の足どりは詳しい資料が手元にないので、推測するしかない。晩年は昔からの同志もほとんどおらず、むなしい日々を送ったのであろうか。日本人の奥さんはどうしたのであろうか。上海に住んでいたようであるが、1923年に以前訪れたことがある青島に家を購入した。この家が今でも残っている。

海に見える高台でとても気に入ったらしい。気候がよく、美しい風景のこの場所は彼の激動の人生の疲れを癒すには最適のところであったのではないだろうか。この家の前に立つと、彼が終の棲家としたのがわかるような気がした。石造りの立派な邸宅で、以前はドイツの提督の家であった。外階段を上がって二階に行くと彼の書齋がある。壁には彼の書いた掛軸がいくつか掛かっている。あまり上手な字ではないな、とその時思ったが帰国して調べると書家でもあることがわかった。私のような素人には分からない字体である。

ネットで調べると、彼の書を、〈行草に鄧石如の隸・草書の筆意を取り入れた霸気の多い書風〉と評していたが何の事だかさっぱりわからない。どなたか解説して頂けないでしょうか。

彼はこの家に約4年住み、1927年古希を迎えた年に病死した。お墓は近郊の「浮山」の山裾にある。この年は、蒋介石が南京に国民政府を樹立した年であり、「南昌起義」のあった年であった。歴史の話が多くて肩が凝った方もいらっしゃると思うが、青島市の区部を語るとき近代の歴史抜きには難しい。次回はもっと古い時代の青島市と、道教の聖地である「嶗山」を中心に紹介したい。

(次号に続く)

## 「四姑娘山・写真だより」の里を訪ねて—⑥ 日隆へ

佐々木健之

これで最後と、建物脇の木戸までもう一度行き、かんぬきを外す方法はないかしらと、懐中電灯で子細に調べた。すると鍵穴付近は革製のカバーで覆われていて、道路側から見ると、かんぬきが閉まっているように見える。しかし、木戸の内側からカバーをめくって施錠部を露出すると、かんぬきはブラブラで簡単に手で外せることを発見した。簡単にいえば、鍵は施錠されていないから、中の人が出るとは可能になっているのだ。こういう珍奇なドロボウ騙しの仕掛けには驚いた。私が中国語に堪能なら、宿泊時の注意として夜間早朝時の外出について、かんぬきの説明があったところか。

そんな次第でなんとか、宿から脱出した。今朝は高みから両河郷を俯瞰しようと思い、前日見込みを付けていた川向こうの山道に取り付いた。しかしあまり進まないうちに、小藪に覆われたけもの道(牛か)になってしまった。カンが外れた。

次の脈のありそうな道を探すため、行き詰まった道を引き返した。村の中心部を通り過ぎ、脈のありそうな小道に入り込んだが、その道も行き止まりで農家の庭に続いていた。これはまずいとまた引き返す。戻りつつ遠くを見やれば小高いので見晴らしがよい。これはよいアングルだとカメラを構えた。すると背後に人の気配、ぎょっとして振り返れば、なにやら長いものを担いだ農家の青年であった。後で分かったが、担いでいる物は農業用マルチシートで、野菜の植え付けに使う物だ。ただし、日本でよく見る市販の黒いビニールではなく、透明シートを巻いて穴を開けた手作り品であった。

とっさに「にいーはお」と取り繕うと、あちらも「你好」の返事。そしてなにやら話しかけてきたが、解りません。こちらはニコニコして逃げの一手、「ていんぶどん(听不懂=わかりません)」を連発しながら、連れだって宿の方へ戻った。午前6時前という早朝から働きに出るとは勤勉な農民青年だ。

宿に戻ると、正面の入り口扉は施錠してあり、開かなかった。予想していたので、出てきたときと同じ木戸から入り、3階にある自分の部屋へ戻った。

朝食は昨夜と同じ食堂で摂った。マントウやお粥が主で、中国風である。両河では2泊したが、小さい村では



両河郷の宿「両河人家」。右側の木戸が閉まっていたが、手でかんぬきを外して外に出た。

食事処の選択肢はなく、いつも同じその店であった。

朝食が終わると、植物観察・撮影会で付近の山野へ行った。場所は秘密である。

両河2日目の朝も、早朝散歩に出た。今度は村の下流に注いでいる支流を遡ることにした。橋を渡ると川沿いに舗装した小道が延びていて、これを散歩道とした。すぐに「虹光村」という村落を通過した。舗装が切れるとその後は人家は無く、渓谷沿いの砂利道となった。

早足で30分程歩くと、川は二股に分かれていた。川幅の広い本流には砂利道が続き、支流の谷は小道があり、見えない谷の奥に続いていた。そろそろ戻らないと、朝食に間に合わない。二股に分かれたところにある橋まで行き、今朝の散歩はここまでとした。散歩途中で途中で追い抜いた、牛数頭を連れた二人が支流の谷へと進んでいく。思わず手を振ると、向こうも手を振ってきた。

日本へ帰ってから、グーグルアースで調べると、虹光溝という、景勝地が支流の奥にあり、牧草地になっていた



放牧場に出掛けるのか、牛追いの農民。



日隆の宿「日月山庄」前の道路。



ほとんど完成した大川邸。村の観光地図では「大川健三展示館」となっていた。

るようだ。牛追いの村人には何組か、行き会った。

宿へ戻る道では、2人乗りオートバイや、小型乗用車とすれ違った。見渡す限りでは、人家は無いが、谷の奥には村落があるのだろう。

朝食時刻に間に合うよう、せわしく歩いていると後ろから車の通る気配がした。やり過ごそうと道路の端に寄ると、すーっとその車が止まり、運転手が話しかけてきた。カメラをぶら下げた旅行者丸出しの私に道を尋ねるわけではない。これは乗れということか…。こころみに後部座席のドアに手を掛けて、

「可—以—嗎?(いいですか)」

と問うと

「可以(いいよ)」

ということで、ありがたく乗せてもらった。

乗ってみると、助手席には女の子を抱いた若いお父さん。あるいは運転席にいるのがお父さんで、助手席は親族か。残念ながら込み入ったことは分からないが、親切な一族のおかげで、あつという間に宿のそばまで着いてしまった。

朝食には余裕を持って間に合い、他のメンバーよりも余計に見聞ができて満足であった。

朝食が済むと、いよいよ最後の訪問先、「日隆」rìlóngへ向けて出発した。



ソスマンさんと河本さん。

来たときのように3台の車列を組み、昼過ぎには「日隆」に着いた。宿は大川さん指定の常宿「日月山庄(以前は日月山荘)」で経営者だった村長は、経営権を年額20万元で楊さんという漢人に貸し

出したそうで、屋号が1字変わったのはそのせいだ。但しホームページのロゴマークでは「日月山荘」となっている。

大川さんの活動拠点は「日隆」、「丹巴」、「成都」と3つあり、中でも四姑娘山観光基地「日隆」には現在建築中の大川家の建物がある。この建物は基礎工事からして、想定外のでき事、事件が続き、大川さんを悩ませ続けているのである。それでも完成寸前までこぎ着けて、大川さんはやれやれだろう。

2008年の四川大地震で被害があった「日隆」はすっかり化粧直しを施し、観光の街となった。私は地震以前のことは知らないで、とやかくいう資格はないが、目抜き通りは人工的に作られ、こざれいである。

建築中の大川さんの家は、高台にあり堂々とした2階建てで外観、内部ともほとんど完成しているように見えた。近隣の家と調和した政府指定色で塗装するため、現在の外装は打ち放しのコンクリートで味気ない。中を案内してもらおうと、こちら内装前でいかにも工事中的感じである。大川さんの説明によると、壁紙業者が壁の瑕疵は無視して、とにかく貼ればよいという方針で貼ってしまった。しかし壁のデコボコはそのままなので、やり直させているところ、ということであった。

大川邸が完成後は、四姑娘関連の写真を展示したりするお考えのようだ。

夕食時には、日月山庄オーナーの女あるじソスマンさん(わんりい 128号に紹介記事有り)がリップサービスに現れ、手作りの葡萄酒をサービスしてもらった。

明けて2012年6月16日、成都に戻るときになった。巴郎山峠を越えて成都に続く道は、峠を越えた成都側が地震の影響で悪く、ドライバーの真価が問われる。いつまでも続く悪夢のような道も、昼頃には成都平原の西はずれ、「都江堰市」市街にたどり着いた。昼食後、成都への渋滞した道が旅の余燼となった。

今回の旅を企画した河本義宣さんと、行き届いた配慮で案内していただいた、大川健三さんに非常に感謝している。

(終り)



### 7月15日(日)

日曜日は“ボランティア”はない。ホブドから150kmほど離れたチャンドマニ村に行きたい、と数日前からツォゴウに頼んでいた。往復300kmだから、車で日帰りできる距離だと思う。しかし、ツォゴウは「なぜそんな不便なところに行きたいのですか？」と不思議がっていた。

チャンドマニ村は、ホーミーの発祥地といわれ、10年ほど前、NHKテレビで、ユーミンがその村を訪ねて、ホーミーを聴く、という番組が放映されたこともある。また数年前には、“チャンドマニ～モンゴルホーミーの源流”という映画も上映されたから(私は見ていないが)、ホーミー好きの日本人なら、この村の名前を知っている人は多いと思う。

ツォゴウは「チャンドマニ村の人たちも、夏はサマーハウスに行ってしまうし、ホーミーの名人たちも、あちこちのナーダムに出かけていってしまって、村に残っている人は少ないですよ」と言う。ホブドのナーダムで、ホーミーをたっぷり聴いたのに、まだそれでも足りないのか、と言わんばかりだ。

それでも私たちは行きたかった。そこまで言うなら、ツォゴウが動いてくれた。しかしホブド市内を走っているタクシーの運転手で、チャンドマニ村への行き方を熟知している人は少ないし、車もランドクルーザーでなければ無理とのこと。車の手配が難しいようで、前日になってもみつからなかった。

ところが、日曜日朝10時頃になって、ツォゴウから、「車の手配がつかしました。これから行きましょう」と連絡があった。やってきた車は、ナンバープレート0005のホブド県庁の公用車とその運転手(0001が県知事の子で0001から0008くらいまでが公用車)。彼はチャンドマニ村の近くの出身で、そこまでの道もよく知っているらしい。ツォゴウの父のホブド県知事が骨折ってくれたようだ。私たちはそこまでしてチャンドマニ村に行かなくてもと思ったが、こうなってしまうたら、お言葉に甘えて、連れてっていただく、素直に喜んだ。ガソリン代として100,000トゥグルク(Tg)、道中に店はないから、食べ物・飲み物の用意をとのこと。

モンゴルのガソリンは1ℓ約2,000Tg(約120円)、日本とほとんどかわらないが、モンゴル人に



ラクダと友人M(チャンドマニ村への途中で立ち寄った)

としては非常に高い。モンゴルの物価は日本の10分の1程度だから、庶民がマイカーを持つことは無理だ。モンゴルの物価は、民主化後、急上昇し、市民生活に深刻な影響を与え、この国も貧富の差が拡大しているという。

途中市内のザハ(市場)で、食料や水やみやげ用のアルヒやキャンディを買い、出発したのは午後1時頃だった。ホブドから南東へマンハンまではハルオス湖を左手に見ながらの幹線道路。マンハンから左に曲るともう道とは名ばかりで、ほとんど草原のど真ん中を走る。途中車を停めて、ザハで仕入れてきた食料で遅い昼食。腹ごしらえをしてまた出発。運転手は何を目印に車を走らせているのだろう。3000m以上の高い山が左手に見える。1時間ほど走ったところで、ゲルが見えてきた。そこはこの車の運転手の親戚のゲルで、ラクダをたくさん飼育して生計をたてている。そこにお邪魔して、ラクダの乳をご馳走になった。そこでは、4世代20人くらいが生活している。Mはラクダの乳搾りもやった。ラクダの後足を縛って固定し、蹴とばされないようにしてから搾乳する。

そこを出発して、また1時間くらい走って低い峠を越えたところにチャンドマニ村があった。人通りはほとんどない。この村の村長の家を訪ねた。ツォゴウの父が事前に連絡しておいてくれたようだ。私たちは馬頭琴の伴奏でホーミーを聴きたいとお願いした。村長はあちこち電話してくれたが、なかなか見つからないようだ。馬頭琴でなく別の楽器でもかまわないと言う

と、しばらく村の中を走り、ひとつのゲルに案内された。馬頭琴でなくトプショールという楽器を手にした3人が私たちを迎えてくれた。トプショールでの伴奏は2曲くらいで、あとはカラオケでのホーミーだった。

40分くらい演奏を聴いたあと、井に入った麵をご馳走になった。村長の話では、この村の人口は約3000人だが、遊牧民は定住しないから、年中ホーミーをやっているわけではない。結婚式や祭りのとき以外は集まってホーミーをやることはほとんどない。きょうホーミーをやった人は、この村の役場などで働いていて定住している人で、趣味程度にホーミーやトプショールをやっているとのこと。

ツォゴウは、はじめは一人に当たり50,000Tgずつお礼をしてほしいと言っていたが、30,000Tgでいいということになった。麵をふるまってくれたこのゲルの女性にお酒(アルヒ)とキャンディを、村長にアルヒを渡して、午後8時、私たちはゲルを後にした。そろそろ薄暗くなっていた。

帰りは、時々車のライトにびっくりして逃げるウサギなどの小動物のいる草原をひた走り、寄り道もせず、休憩もせず、4時間でホブドに戻ってきた。ホーミーは期待外れだったが、ラクダを飼っている家族のゲルを訪問できたことは、大きな収穫だった。

## 7月16日(月)

午前中は、“ボランティア”。午後から、“親の会”の人たちから川原でバーベキューをしようと誘われた。ツォゴウは用事があるって行けないという。食べるだけだから、通訳がいなくても何とかかなるだろうと、喜んで連れて行ってもらった。

総勢11人が2台の車に分乗して出かけた。私たちの車は普通の乗用車なので、でこぼこの草原を走ると車の腹をこする。1時間ほど走って目的地の川べり(ボヤント川の支流)に到着。すぐに準備に取り掛かる。持ってきた道具や材料を並べる。出来上がるまで休んでいるようにと、私たちのために小さなテントまで用意してくれていた。Mはすぐに昼寝。私はモンゴルのバーベキューが珍しくて、ずっと見学させてもらった。きょうの料理はホルホグ(行宮焼)というモンゴルの伝統料理だとのこと。

まず男性が石で囲ってかまどをつくり、火をおこす。燃料の牛糞に火がつくと、牛糞の間にこぶし大の丸い石を並べる。石が焼けるまでの間に、女性は大鍋に水を入れてかまどで湯を沸かし、茶葉・牛乳・塩を入れ、



川原でバーベキューの準備

スーティーツアイを作ったり、川で野菜(じゃがいも・人参・ネギ・キャベツ)を洗う。ネギはざく切り、キャベツは1枚ずつはがす、皮を剥いたじゃがいもと人参はまるごと使う。残りの男性で骨付きの大きな羊肉の塊をナイフで切りわけ、塩水につける。材料の準備ができると、大きな牛乳缶に水と羊肉と野菜を入れ、その上に熱々に焼いた石を並べる、羊肉・野菜と石を交互に重ねて、香辛料を入れ、蓋をして密閉して、火にかけて蒸し焼きする。

待つこと1時間、草原に絨毯を敷いて座り、スーティーツアイを飲みながら、おしゃべりをしたり、シャガイ(羊のくるぶしの骨)でゲーム(4個をサイコロのように使って遊ぶ)をしていたが、私は、見えてもルールがわからないので、その辺りを散歩。

料理ができあがり、いよいよ宴会の始まり。酒は、アルヒ・ビール・日本の焼酎(私たちがお土産として持参した)。アルヒと焼酎はモンゴル流に井のような大きな器に入れて飲みまわす。彼らの酒の飲みっぷりも肉の食べっぷりも見事だ。車を運転する2人もかなり飲んでいる。日本だったら即免停だ。

料理と一緒に取り出した石は、患部にあてると薬用効果あるからと、「女性だったらここだよ」と私の下腹部に石を置いてくれた。温かくて気持ちがいい。

後日知ったことだが、焼き石は、熱が食材の奥深くまでじんわりと浸透し、肉に適度な弾力を残しながらも、しっとり柔らかくに仕上がるそうだ。そして、肉は、骨の周りが一番美味しいという。だからモンゴル人は、骨についた薄い膜までこそぎ取り、骨がつるつるになるまできれいに食べる。骨に肉がついて残っているなんてありえない。

バーベキューが終わり、センターに戻ったのは9時過ぎだった。

(次号に続く)

今回は何を書こうかなと考えている時に、スリランカ人の日常生活の中でも大切な行動だと僕が思っている「水浴び」について、これまでテーマにしたことが無いのに気が付きました。今回はスリランカの人達が一日に何度も行う水浴びを紹介しましょう。

スリランカでは暑さの程度を表すのに使う言葉は、「暑い」「少し暑い」「とても暑い」の三種類で足りると言われています。少なくとも僕の友人達はこの様に表現します。キャンディやヌワラエリア周辺の高原地帯では朝晩は涼しくなりますが、日中の暑さはかなりの物で同じような表現になります。年間を通じて季節による温度差はほとんどありませんから、ほぼ一日中暑いので少し動いただけで直ぐに汗まみれになります。更にスリランカの人達は綺麗好きなので、一日に何度も水浴びをして着替えをします。遊びから帰ってきた時、学校から帰ってきた時、会社から帰ってきた時、畑仕事や庭仕事やそのほか何処から帰ってきた時に、時には理由が無い時でもスリランカの人達は水浴びをするのです。

何処で水浴びをするかと言うと、近場に手ごろな水浴び場がない都市部の人達は自宅の浴室でシャワーを浴びます。都市部を離れると、各々が自分のお気に入りの水浴び場を近所に持っています。家の前を流れる川であったり、以前紹介したTANK(貯水池)であったり、裏山から流れ落ちて来る小さい滝であったり、家の屋根に設置された雨水を溜める桶の水を利用したシャワーだったりします。ドライブをしていると、本当にそこかしこで水浴びをしている姿を見ることが出来ます。時には道路脇の側溝で水浴びをしている、建築作業員とおぼしき人がいて、車の埃をまき散らすのが申し訳ない気持ちになります。

建設会社の駐在員だったので、工事現場の寮で作業員達の終業後の姿を見る機会が多くありました。仕事が終わって最初にするのが水浴びです。現場にある給水塔の下部にシャワーが取り付けられてこれを使います。サロン(又はサロマ)と呼ばれる1枚の布を腰に巻きつけて上半身裸で、石鹸を頭のとっぺ

んから体中にこすり付けて、泡だらけになって水浴びをしていました。この時に使う石鹸ですが、スリランカ国産の石鹸や最近では各種薬草入りの薬用石鹸が出回ってきていますが、何と言ってもラックスブランドの石鹸が一番人気です。日本でもこのブランドは人気がありましたが、スリランカでは今でも値段は高めですが、このブランドの石鹸の人気が高いようです。

川や貯水池で水浴びをしている女性達は、頭からすっぽりかぶるポンチョの様な胸から下を隠す服を着て、あまりジロジロ見る訳にもいかないので想像ですが、服の中で体を洗っているようです。女性達は子供、友人達と誘いあって洗濯を兼ねて水浴びに来ています。話をしたり笑いながら洗濯をし、逃げ回る子供達を捕まえては服をはぎ取って体を洗っていきます。女性達が水浴びを始める頃には子供達は裸のまま、石の上から水に飛び込んだり、水を掛け合ったりして時間が過ぎていきます。川での水浴びの様子は2008年3月に紹介したバス旅行・最終話でも書いているので参照ください。

コロomboからキャンディに向かうと、キャンディの少し手前に長い坂道が続く場所があります。景色の良い場所なので観光客目当ての小さな食堂や果物屋が点在しています。一番の眺めはバイブルロックと呼ばれる、聖書のような形をした岩山で、この岩山周辺でインディージョーンズの1作目の一部が撮影されたことでも有名です。

この場所で紹介したいのは景色の良い側とは、道路の反対側にあります。こちら側には切り立った岩山しかありませんが、ただ一つあるのは山の中腹から垂れている長いホースです。流れ出る水は山の地圧を受けて、まるで高圧洗浄機のような水圧で、水の勢いでホースが踊っています。もともとは山から水を抜いて山が崩れるのを防ぐためではないかと思いますが、この高圧ホースを使ってトラックを洗っている運転手をよく見かけます。車を洗い終わると、運転手はその仕事でかいた汗を流すために水浴びを始めます。

ホースを上に向けて持ち噴水のようにします。直接に体に高圧の水をかけると痛いでしょうね。仲間同士でホースを持ち合ったり、片手でホースを持ち空いた手で体を洗っている器用な運転手もいます。そんなに無理をして、この場所で水浴びをしなくても良いのではないかと思います。水浴びが気持ち良いでしょうね。此处では景色を見るのが当たり前ですが、もしも景色を見るのに飽きたら反対側も面白いですよ。

スリランカ各地で活動している海外青年協力隊の人達は、活動先の住人と同じように水浴びをしていました。温水シャワーのあるような場所では隊員達は活動していないからです。コロンボにいる隊員がよく利用する、コロンボで一番安い日本食レストランで会った何人かの隊員に、何処でシャワーを使うのか聞いた事があります。さすがに川という人はいませんでしたが、主に家の屋根に設置された雨水桶を利用したシャワーか、裏山から落ちてくる水を集めたシャワーを使っていたようです。

いずれも水が冷たいので慣れるのが大変だったようですが、慣れてしまうとスリランカの人達と同じように日に何度も水浴びをするようになるそうですが、それでもたまには温かいお湯のシャワーか、浴槽に浸かりたくなるそうです。

### 使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。古切手は周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に‘わりい’の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

‘わりい’は、いつでも入会を歓迎しています。  
年会費：1500円 入会金なし

\*入会月によって会費は割引されます。お問合せ下さい。

郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わりい’

‘わりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わりい’を発行し、情報の交換に努めています。

‘わりい’の活動の様子は、おたより又は‘わりい’HPをご覧ください。

入会されると

①年10回おたよりをお送りします。

②‘わりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100（事務局）

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わりい’をpdfファイルでお送りします。こちらは無料です。

◆町田国際交流センターで、ご自由に取ることができます

### 松本杏花さんの俳句

### 「千里同風」より

#### 雪つりの風と遊べる日永かな

diào zhī fáng xuě yā  
吊枝防雪压

què yǔ fēng ér xiāng xìshuǎ  
却与风儿相戏耍

cháng rì zhōngtiān guà  
长日中天挂

季语：吊枝，冬。

赏析：应能看出，此首与上两首均为冬末之作。童话般的构思将雪乡的寒风拟人化了。虽然仍是凛冽有余，但相互玩耍的氛围预示着日照将越来越长，春天不远了。

#### 五日かないつも通りの菜買ひに

zhēngyuè yǐ chūwǔ  
正月已初五

yǒu chéng cài diàn lǎozhǔgù  
有成菜店老主顾

chángtài jiàn huīfù  
常态渐恢复

季语：正月初五，新年。

赏析：如同我国过春节一样，初五以后，一些商店便开始营业了。本首俳句表述了作者度过热闹的新年，开始返回平常生活的感受，大有“没有不散的宴席”之趣味。松本女士这种生活态度，值得我们学习

稲城の親愛なる白タク軍団、赤シャツや次仁扎西達と別れた私は、タクシーで昼間の内に荷物を置いていた黒帳篷ゲストハウスに戻った。

宿のフロントを通り抜けたリビングスペースでは、騒々しく洋楽のディスコミュージックが鳴り響き、宿泊者の西洋人達がグラスを片手にダンスに興じていた。しみりチベット世界との別れを惜みたい私にとって、やっぱり此処は自分の来る場所ではなかったらしい。たった今別れてきた稲城の仲間達が恋しくて堪らない私には、この宿の雰囲気は別世界の空間だ。明朝のバスターミナルまでの遠い道のりを思い、わざわざ意に染まぬ不便な場所にやってきてしまった事を改めて後悔した。

リビングに背を向けそそくさとシャワーを浴びると、まだ誰も戻ってきていないドミトリー部屋の自分のベッドに早々と潜り込んだ。

翌朝目が覚めると直ぐに荷物を纏め、まだシンとしてるゲストハウスを足早に後にした。元はといえば話し相手が欲しくて選んだ宿だったが、結局誰とも一言も口をきいておらず、ただ眠る為だけにここやってきた訳だ。しかも、大きな荷物を背負って町の中を歩くのが面倒だった私は、再びバスターミナルまでタクシーに乗ってしまった。この日のうちに成都まで戻ってしまう事を思えば、もう神経質に懐具合を気にする必要もなかったが、安宿に泊まる為に往復タクシー利用なんてバカみたい。いったい今までの節約生活は何なんだ？ そんな自分が滑稽で苦笑した。

別に宿が悪かった訳ではない。バックパッカーの集まる場所は、その時々宿泊客によって宿の空気も変わるもの

だし、それがたまたま私の気分にならなかっただけ。きっとタイミングが悪かったんだろうと思う事にした。

早朝のバスターミナルは相変わらずの賑わいだ。思わず稲城軍団の顔を探してしまっただが、知っている顔には出会わなかった。康定から成都へ向かうバスは一日に何便か出ていたが、次の成都行きのバスの発車にはまだ少し時間があつた。所在なくターミナルの門の前でぶらぶらしていると、「成都！成都！」と声をあげながらやってきた四角い顔の小柄な中国系の男が、私を見ると近づいてきた。

「小姐、何処に行くんだ？」

「成都よ」

「そりゃ丁度いい。だったらタクシーに乗って行けよ。早いぜ。バスなら成都まで7時間だが、タクシーなら5時間だ。俺の弟が運転するが、腕は確かだぜ」

う〜〜ん、バスの発車時刻を待つのも面倒だし、タクシーを使えばより早く目的地に着けるのは確実だ。バス代と比べてそれほど料金が高くなる訳でもなかった。いいんじゃないの？ この旅の先々で出会ってきた気のいい白タクの運転手達のおかげで、こんな乗合タクシーがこの土地ではかなりポピュラーである事も既に判っている私には特に躊躇する理由もなく、ちょっと考えて乗る事にした。どうせこの国じゃバスだろうと白タクだろうと事故の確率など同じようなものだ。その点については、もう運を天に任せるしかないのだ。

「いいわ。乗る」

「そう来なくっちゃ！ よし、他の客を集めてくるからちょっと待っててくれ」

程なくしてタクシーが定員一杯となると、客引きの男を一回り小さくした様な、やっぱり小柄で四角い顔の若い運転手が現れて、成都に向かって出発した。運転席の隣に座らせて貰った私は、目の前に広がる風景を広々と眺められて気持ちが良いが、血気盛んな若い男といった風体の運転手は、案の定勢いよく車をブツ飛ばすのでちょっとハラハラしてしまう。既に馴染の道となっているこの道路で、懐かしい記憶と一致する場所を探しながら風景を見ているのは楽しいものだが、起きているのは心臓に悪い。そう思ってウツラウツラし始めた頃に食事休憩となった。

運転手が1人、タクシーの乗客が4人、街道沿いのバラック建てのような食堂で各々好き勝手に食事した。私はといえば特にメニューも無い店で何を頼んだらいいかわからないのと、康定で浪費した宿までの往復タクシー代と成都までの乗合タクシー代を支払った事で完全に底を付く寸前の懐事情もあり、注文は相変わらず一杯の汁麺だけだ。

サッサと食べ終えてその辺をブラブラしていると、シャツを脱いで上半身裸になり、数種類のおかずをテーブルに並べてワシワシと豪快に昼食を食べていた運転手の男が、「小姐、座れよ」と私を招き、一緒に食べると自分のおかずを勧めてくれた。それまで余計な会話は一切せず、特に友好的な雰囲気は感じられなかった男だが、この時になって初めて少し話してみると、案外気のいい人間の様だった。

男の背中には真空にしたカップを背中に当て、皮膚を吸わせて血行を促す中国古来の健康法(中国語で火罐、日本では吸い玉というらしい)の施術した跡の丸い痣がたくさん並んでいた。裸で飯をかきこむそんな男の姿が、いか

にも中国を感じさせた。

この旅の始まりで成都に滞在していた折に感じていたのは、中国の男の脱ぎっぷりの良さだ。中国の中でも南部に属する四川省の夏は熱帯に近い。その為か比較的庶民的なエリアに所在する成都の宿の周辺で見かけた男達は、皆、短パンに上半身裸姿で街の中をウロついており、やたらと裸の男達が目についた。近所の庶民的な食堂などは、何処も酒を酌み交わす熱気ムンムンな裸の男達の集団でいっぱいになっており、ある意味壮観とも言えるその風景には、少なからずカルチャーショックを受けたものだ。

これまでは山岳地帯の寒冷な気候の中で過ごしていた私は、久しぶりで出会った男の裸姿に、ああ、中国の下界に戻って来たんだな〜と妙な実感を覚えていた。

昼食後はあっという間だった。ちょっと居眠りしている間に車は成都まで到着してしまい、確かにバスよりずっと早い。おまけにバスターミナルから再び重い荷物を担いで目的地までの移動が、タクシーであれば自分の降りたい場所まで送って貰えるのがとっても有難かった。これは乗合タクシーを利用して大正解だ。

それにしても車の窓から眺められる一ヶ月ぶりに戻って来た成都の都会の街並みは、行きかう人人人、車車車、立ち並ぶビル群と、私がこれまで過ごしていたチベットの小さな街とは別世界だ。必要最低限の暮らしの中で十分心地良く過ごしていた私には、またこの物が溢れる飽食の世界に放り込まれるのかと思うと、ちょっと怖気づいてしまうような心持となっていた。

成都では前回と同じ宿に滞在した。この場所もバックパッカーの集まる旅人宿だが、旅好きな日本人女性とシンガポール人男性が旅先で知り合い夫婦となって、この地で始めたというゲストハウスは旅する人間にとって居心地が良く、安全な場所だった。財布の中に残っていた、ほんの数十元の中からこの日の滞在費を支払うと、この日の夕食にやっとな杯の麺が食べられる程度の金額を残して完全にスッカラカンとなってしまった。

旅のスタート時から心もとなかった懐具合のこの一ヶ月を、良くここまで持たせる事ができたと思うが、それは私に食事をご馳走してくれたり、車に便乗させてくれたりした、多くの人の好意に支えられてのものだ。旅の間中ずっと不安を抱えてきた中国元の残額の問題も、日本円からの両替が可能で都会まで辿り着けば、もう心配する事もない。明日早速銀行に行って両替しよう。

それにしても一ヶ月ぶりに戻った宿の雰囲気はだいぶしっとりしていた。前回の滞在時は8月の初めだった。大学の休みなどを利用してやってきていたバックパッカーの若者達でムンムンと賑わっていた中庭のテラスも、9月に入ると旅行者が減ってしまうのか人影がまば

らだ。だが、その時の私にはその静かさが心地よく思われた。

翌日最初にやったのは銀行での両替だ。今までずっとカバンの奥底で眠っていたT/Cを1万円分両替し、お金の心配から解放された私が続いて訪れたのは旅行代理店だ。

当初、四姑娘登山の仲間と訪れた旅行で帰国便のチケットを捨て、中国に居残って旅を続けていた私には日本に帰国する為の航空券が無い。あと数日のビザが切れる前に航空券の手配をし、帰国しなければ不法滞在者になってしまうのだ。手持ちで持ってきた現金とT/Cのみでは航空券の購入には心もとなく、海外でクレジットカードを使った経験のない私には、ちゃんと航空券が買えるのかちょっと心配だったが、なんとか無事にビザ期限の最終日に日本へ帰国する便のフライトチケットを手に入れる事ができた。

お金と航空券、2つの大きな心配事が解消された私は、帰国までの残りの3日間を毎日当ても無く成都の街をブラついて過ごした。振り返れば、毎日のように何かが起こり、誰かと出会っていた旅の日々と比べ、誰とも知り合わず目的も無く、ただ街を歩き回る都会の生活は単調で孤独だった。

広大な土地にこれでもかとはばかりに溢れかえっていた輝く大自然の代りに、目に入るのは飽食にまみれた物の洪水と人ごみと騒音と排気ガスばかりだ。せかせかと早足で歩き去る都会の人々は他人には無関心で、有名な公園に行っても、繁華街を歩いてもどこか空虚で空しい気持ちでいっぱいだった。足は自然に成都の街の片隅にあるチベット人街に向いてしまう。だが、カムパのいでたちをした男達やチベット服に身を包む女性の姿に密かに心を高鳴らせても、そこに暮らすチベット族の人間は皆商人で、ただの旅行者である私は店の商品を買ってあげなければ、単なる用無しの異邦人なのだ。

成都の街に飽きてしまった私は、3日目にはちょっと遠出をして、バスで2、3時間程度の場所にある樂山大仏を見に行ってみたりもした。2つの太河がぶつかり合う合流点にそびえる大岸壁に、全長70メートルともなる巨大な大仏を掘り抜いたこの樂山の磨崖仏は、世界最大の仏像なのだそう。その立地やスケールの大きさ、急峻な岩山の階段を上り下りして直に磨崖仏に触れたり、太河の波に揺られながら船上で磨崖仏を眺めたりと自然のアトラクション満載の樂山大仏見学は、本来の私なら大喜びしそうな場所なのであったが、この時はそれすらも心に響いてこなかった。その日の私の心を占めていたのは、ただ、あの優しい人達の住む天空の世界が恋しいという思いばかりだった。

(次号に続く)

## ◇ ‘わんりい’ 活動報告

平成24年度町田市「つながりひろがる地域支援事業」対象事業

### つなげよう 広げよう 地域の「輪」と「和」 聞いてみよう！ 鶴川に住む留学生たちのスピーチ！！ 楽しもう！ 中国民族音楽！！ ～揚琴、馬頭琴 そしてモンゴル民謡など～

2012年12月2日(日) 会場：鶴川市民センター・ホール

12月2日(日)、鶴川市民センターで、昨年に引き続き、地域の留学生のスピーチと中国の民族音楽を楽しむ、表題事業を町田市の助成により開催しました。事業の構成は、昨年同様の三部構成で、第一部がアンデスの民族楽器・ケーナ独奏、第二部が留学生のスピーチ、第三部は中国民族音楽演奏と歌でした。今年は、揚琴と馬頭琴の演奏にバリトンの歌が加わりました。昨年の会が素晴らしかったと、今年も参加して下さった鶴川地区の皆様や、遠方から足を運んで下さった方々など、250人近い方々が楽しんで下さいました。

今年は中国の留学生が4人、中央アジアのキルギス共和国の留学生2人がスピーチを行いました。どの留学生のスピーチも、日本語が上手な上に、内容も又日本人として考えさせられる立派なものでした。また、第二部の留学生たちのスピーチの最後には、中国大連からの留学生・顧傑さんのピアノの演奏があり、休憩時間にはキルギスからの留

学生ケレザさんが当地の弦楽器を飛び入りで演奏下さりました。

この催しにより、地域の方々が留学生の存在を身近に感じて下さったことでしょう。留学生達も、人々の暖かい拍手に包まれて、留学の良い思い出が出来たと思います。彼らが学業を終えて帰国した時、日本で思い出話に鶴川でのことが加われば、地域の“輪”が海を越えて広がることになります。

この日参加した留学生達の心に、日本での楽しい一日として記憶されれば、彼らの将来の活躍の中で、日本と、中国・キルギスの友好にほんの一助にでもなるのではないかと、期待が膨らむ一日でした。

(有為楠)



12月2日フィナーレで舞台上の留学生や中国民族音楽演奏者らと会場が一つになって文部省唱歌「ふるさと」を歌う。 撮影：河本義宣

## 留学生たちのスピーチ 1

### 日本に来て感じたこと

国土舘大学21世紀アジア学部1年 鐘嘉慧 (中国深圳市出身)



私は2012年9月11日に日本に来ました。日本に来てからそろそろ2ヶ月が経ちます。初めて日本に来ましたので、毎日が面白くて、楽しいと感じています。

私は旅行が好きです。しかし、時間があまりないですから、東京周辺のところへいきました。例えば、巾着田へ行きました。巾着田の彼岸花はすごく美しかったです。夜の東京ス

カイツリーも行きました。夜のスカイツリーからの眺めは素晴らしかったです。雷門と浅草へも行きました。浅草はとても賑やかでしたが、同時に東京の昔の姿を見ることができました。

しかし、一方で、日本語が上手でないせいで、日本人と交流することは、とても難しいと感じることがあります。例えば日常生活の中で、中国人は何時もはっきりと自分の考え方を相手に伝えます。「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」とはっきり言いますから、相手にとっては理解しやすいです。

それに対して、日本人は直接的な表現で自分の考えを伝えることはとても少ないように思います。多くの場合、

「はい」なのか、「いいえ」なのか分からない、曖昧な言葉を用いるように思います。日本人がそのような表現をする理由は、自分の言葉で相手の感情を傷つけるのをできるだけ避けたいためではないでしょうか。

日本語の尊敬語、謙譲語と丁寧語は私たち中国人が日本人と交際する際にとっても重要ではないかと思いま

す。私たち中国人は、日本人がこのような言葉を使う文化的背景を理解する必要があると思います。

中国の考え方で日本人と付き合いののでは、日本の皆さんに失礼をしてしまうかもしれません。お互いが良く理解しあえるように、日本に留学をした私は、日本語をもっと勉強しなくてはならないと思っています。

## 留学生たちのスピーチ 2

### キルギス、明るい未来を目指して

国土舘大学21世紀アジア学部3年交換留学生  
クランベコフ・アディレット(キルギス共和国 ビシュケク市出身)

「ソ連時代は生活しやすかった。1ルーブルで沢山のものを買うことができた。例えば、平均給料は200ルーブルでも、新しい車は4000ルーブルぐらいだったので、ちょっと貯めて簡単に買える時代だった。失業者の数も少なかった」と言って、ソ連時代を懐(なつ)かしがって、今の時代を批判したりする人がいます。私は子供のころから、両親がこんな話をするのを何回も聞かされてきました。そして、「ソ連時代はよかったのに、どうして戻ることができないのか」と、子供なりに考えていました。けれども、成長(せいちょう)するにつれて、私の考え方は変わってきました。

ソ連時代は、キルギスにとって良かったといわれますが、しかし、私は、今はソ連時代よりずっと良い時代になったと思います。確かにキルギスの物価はソ連時代に比べるとずっと高くなりましたから、生活は大変です。失業率も20%になりました。しかし、キルギスは500万人が住んでいる、日本の北海道より少し大きいだけの小さな国ですが、今は独立した国です。キルギス人は自分の国の旗や国歌を持っ

ていることを誇りに思っています。

キルギスは独立してから、ソ連時代には忘れられていたキルギスの伝統や文化を取り戻しました。昔の祭も復活しました。

更に、キルギス共和国として、国際連合に加入しています。けれどもキルギスの政治は汚職が多くまだうまくいっていません。医療や福祉などの社会的問題、生活基盤の整備など問題が沢山あります。ですから、キルギスはこれら問題を解決して発展していかなければいけない若い国で、若い力が求められています。

私は交換留学生で、1年間の短期留学ですが、国に戻って日本語などを更に勉強し、もう一度日本に留学して日本の国を学び、キルギスの今後の発展に貢献したいと決心しました。



## 留学生たちのスピーチ 3

### 来日一年間の感想

国土舘大学21世紀アジア学部4年 王天陸(中国 大連市出身)



去年の九月六日に、私は中国から留学生の一人として日本に来ました。初めて20年以上暮らした祖国を離れ、中国より一時間早く進んでいる日本にやってきました。飛行機を

降りて、空港に着いたばかりの時、少しドキドキしており、ようやく日本についたと思いました。興奮しながら、周りの様子を見てみると、中国にいた時の、大学での日本語リスニング授業の内容が実現化された感じがしました。

私は空港から自宅に向かうバスの中で、窓を通し夜の東京の様子を見ていました。その時は、全国で節電をしていたけれど、それでも東京の賑やかさがとても感じられました。そして、東京の残暑がまだ続いてい

た時に、私の留学生活が始まりました。時間は経つのが速いです。私は東京で二度目の夏を迎えました。その一年の間に、嬉しいことも、悲しいことも、たくさん経験しました。それでは、いくつか例をあげ、お話ししていきたいと思います。

将来日本語に関する仕事をしたいため、日本人の日本語や日本人の日常生活には、非常に興味を持っています。私は日本人に質問をする時、はっきりした答えがもらえないことが多いと感じました。また、多くの日本人は積極的に自分の意見を言わず、ほかの人の意見を聞き、自分の意見と違っていても、直接反論はしません。「そうですね」など賛成をするような話をして、間接的に自分の意見を述べる人が多いと感じます。

私は、それは日本人の「和の文化」の特徴の一つではないかと思っています。直接に反論をすると、相手に不快感を与え、失礼なことになってしまうかもしれないので、その曖昧な言い方は、相手に対して、尊敬する話し方ではないかと考えています。なので、私も生活の中で、その話し方を理解し、そして、自分もその

ように話すようになりました。このような経験は日本に来なければ絶対に分からないと思います。

続いて、日本での日常生活について発表していきたいです。

日本の交通の便利さには大きな衝撃を受けました。電車が時刻表の通りに運行したり、待ち合わせすることが出来る国は世界で日本だけだと言われています。私もその日本だけの特別な便利さを毎日楽しんでいきます。

以上が私の一年間の留学感想です。病気や困難に落ち込んだ時に、私は自分になぜ一人で日本に来たのと何度も問いかけてました。苦しい時や悩む時に、自分で解決する方法を見つけ、一人で乗り越えたことで、成長し、逞しくなりました。このような経験は人生には何よりも大切だと思います。

まだまだ一年目なので、これから経験していないことが待っているだろうと思います。未来に何があっても、私は自分に自信を持ち、怖がらず、留学経験を豊かにするために、頑張っていきたいと思います。

#### 留学生たちのスピーチ 4

### 私の好きな日本語「いただきます」について思うこと

国土舘大学21世紀アジア学部1年 劉嘉琦(中国 深圳市出身)

皆さん、こんにちは。国土舘大学21世紀アジア学部1年生、劉嘉琦と申します。今年9月に来日しました。今日の、私のスピーチのテーマは「私の好きな日本語・「いただきます」について思うこと」です。皆さんにも「いただきます」について私と一緒に考えて頂けたらと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

スピーチを始める前に皆さんに質問が一つあります。どうして日本の人たちは、ご飯を食べる前に、自分一人で食べる時でも「いただきます」というのですか。外国人の私にとっては不思議な風景です。

不思議ですが、それでも私は、日本語を勉強し始めてから、まもなく、日本語の「いただきます」という言葉が好きになってきました。

何故、日本の皆さんが食事の前に「いただきます」を言うのかということには次のような解説があります。「日本人はご飯を食べられるのは神様のお陰だと思っていますから、ご飯を食べる前に、神様への感謝を表すために、「いただきます」と言います」というものです。

しかし、私は、「いただきます」ということばの後に、ほかのものが省略されているのではないかというように感じています。本来は家族一緒に食事のテーブル

の前に座って「いただきます。皆さんも一緒に食べましょう」だったのではないのでしょうか。「いただきます」とあいさつする時、皆さんと一緒に食べる喜びの気持ちが込められていると思うのです。

わたくしが小さい時、家ではいつもファストフードを食べていました。父と母は、店の仕事がいっぱいで、いつもいそがしくて、母は、ご飯を作る時間がありませんでした。ですから、子どもの私は、ファストフードをいつも食べさせられていたのです。私は、いつもファストフードを食べながら、「家族と一緒にご飯を食べたいなあ」と思っていました。一人でご飯を食べるのは、とても寂しいものです。

両親の努力のおかげで、店がうまく行くようになって、母の仕事も少なくなって来ました。ようやく母がご飯を作れるようになって家族と一緒に食事をする



機会が増えました。子どもにとって母の作ってくれたご飯を食べることはとても幸せなことです。なぜなら、母のご飯には、母の愛がいっぱい込められているからです。母の愛に感謝を表すために「いただきます」と言えば、母は嬉しく思うでしょう。そして、母の喜ぶ顔を見ると私も幸せを感じます。家族と一緒に食事をし、「いただきます」と言い合って食事をするとき、私は家族からの愛情を満喫しているのです。

私は家族と一緒にご飯を食べることは大切だと思います。家族と一緒に食事をする時、お腹がいっぱいにするだけではなくて、同時に家族といろいろな話をすることもできます。

皆さん、家にいらっしゃるとき、どういうふうにご飯をなさいますか。一人で食べますか。それとも家族全員そろってから一緒に食べますか。もしも以前の私と同じなら、何とか時間を作って家族と一緒に食事をしてください。神様への感謝を表す「いただきます」だけではなく、ご飯を作ってくれる家族への感謝や一緒にご飯を食べる喜びを表すために、みんな一緒に「いただきます」を言い合えるとよいと思います。

「いただきます」という言葉は、家族が幸せな気持ちで食事ができ、一層食事を美味しくさせる魔法のことばだと私は思っています。

以上です。ありがとうございます。

♣新年号では、紙面の関係で4名のスピーチの内容を掲載しました。残り3名の皆さんのスピーチは、次号に掲載します。尚、12月2日(日)と12月9日の催しの風景を、「わんりい」のHP更新日(1月5日予定)までに掲載します。どうぞこちらを訪問くださいますと、当日の様子をご覧ください。

### 【アンケート集計】

#### \*参加者227名(招待者含む)中回答者57名

##### 1. 今回の催しを知ったのは

- イ. チラシ22      □. 知人の紹介25  
ハ. 広報3      ニ. その他(ポスターなど)5  
ホ. 無回答2

##### 2. どちらにお住まいですか

- イ. 鶴川団地11      □. 団地外鶴川地区7  
ハ. 能ヶ谷4      ニ. 広袴2  
ホ. 真光寺7    ヘ. その他(・町田市内15 ・町田市外10)

##### 3. どの年代でいらっしゃいますか

- イ. 10～20歳代0      □. 30～40歳代3  
ハ. 50～60歳代32      ニ. 70歳代以上22

##### 4. 今日の催しは全体として、

- イ. とても良かった43      □. よかった5  
ニ. まあまあ0      無回答9

##### 5. 個々のプログラムについて

###### ①ケーナの演奏

- イ. とても良かった40      □. よかった10  
ハ. まあまあ1      無回答6

###### ②留学生のスピーチ

- イ. とても良かった42      □. よかった11  
ハ. まあまあ1      無回答3

###### ③中国民族音楽演奏

- イ. とても良かった50      □. よかった1  
ハ. まあまあ0      無回答6



### 【自由感想】(沢山の同様なコメントの中から抜粋し掲載)

▶アットホームで良かった。馬頭琴の演奏が特に良かった。留学生が400人もいるのに驚いた。普段から交流できればと思う。(鶴川団地70歳以上)

▶演奏、歌、スピーチすべて良かった。司会の方もとても良かった。日本の心を理解してくれている留学生の皆様へ感動。全ての人々が仲良く平和でいられるように願う。(大蔵町50～60歳代)

▶鶴川地区に立派な留学生が滞在されていることにびっくり。日本人として反省させられる話などもあり感謝。イベントの濃さに驚き！(真光寺70歳以上)

▶予想以上に大変良かった。歌、馬頭琴、揚琴いずれも最高。500円でこんな良いものを聞かせて貰ってもったいないと思えた。(真光寺50～60歳代)

▶日本語スピーチは内容、発音、技術(イントネーション、間etc)がかなりのレベルで感動。

▶市内の、それも身近なところでこんな豊かな交流がなされているとは知りませんでした。今特に中国との政治的困難の状況で私たち市民レベルの個々の交流を深めることが真の友好になり、平和につながると感じました。留学生の皆さんの真剣さ、一生懸命さがよく分かりましたよ！(図師町50～60歳代)

▶近くの大学に400名もの留学生が学んでいることを知りませんでした。みなさん日本語がとても上手で驚きました。演奏が素晴らしかった！(団地外鶴川地区30～40歳代)

▶政治の混乱する折、このような民間交流、特に留学生たちに日本の民間の姿を体験させることは有意義です。(つくし野70歳以上)

▶若い留学生の主張を楽しく聞かせて頂きました。第3部の演奏は本当に素晴らしかったです。500円は安すぎて申し訳ないです。(町田市外70歳以上)

▶中国民族音楽演奏は、質の高い素晴らしい演奏と歌で、幸せな時間を過ごせました。こういう企画は本当に良いと思いました。留学生の方々の方々のスピーチを聞きながら少し恥ずかしくなりました。とても日本人のことをよく話してくださったからです。スピーチにあるような人になりたいものです。(町田市外50～60歳代)

◆わんりい活動報告

平成24年度町田市「つながりひろがる地域支援事業」対象事業

つなげよう 広げよう 地域の「輪」と「和」・その2  
留学生たちと料理を作って交流しよう!

2012年12月9日(日) 場所: 鶴川市民センター・第二会議室

平成24年度の、町田市「つながりひろがる地域支援事業」では、事業に地域の交流活動が含まれることが条件の一つにあり、今年度は、水餃子を留学生たちと一緒に作って交流する企画を盛り込んだ。餃子の皮を捏ねるといって、簡単そうでなかなか奥の深い作業は、やはりその道のベテランの何嬢嬢さんに指導をお願いした。留学生5名と日本人16名の、講師を含めて総勢22人分の水餃子用として、



中国人留学生・顧傑さんの手つきを真似るのだが…



日本のオジサンたちも真剣な表情で丸めたり、のぼしたり…



一生懸命、餃子の餡を包む留学生たち



トマトと卵のスープで破顔の乾杯!



キルギス料理をつくるケレザさん

2kgの小麦粉と2kgのひき肉、巨大な白菜2個に、皆、慣れない手つきで取り組んで、粉を捏ねたりのぼしたり等、大わらわの格闘3時間の末、和気あいの会食を楽しんだ。

‘わんりい’の岩田温子さんが持参の口琴を、キルギス人留学生・ケレザさんが演奏したり、中国人留学生の顧傑さんが中国の歌を披露。日本のオジサンが、親指大のハーモニカを演奏したりで、今後の交流活動の展開が期待できる有意義な活動だった。(田井)



ケレザさんの口琴の演奏に耳を傾ける

## 中国の笑い話 IV (「365夜笑話」より)

### 第15話：早起き

兄さんは朝早く起きて、弟がまだベッドの中なので、起こしながら言った。「早く起きろよ。知ってるか、早起きの鳥だけが、幼虫を捕って食べられるんだぞ。」弟は、寝返りを打ちながら、不服そうに言い返した。「幼虫は、もうとっくに鳥に食べられているよ。何でこんなに早く起きるのさ！」

### 第16話：何時に寝たか

母：「あなたは、ゆうべ何時に寝たの？」  
 子：「時計がちょうど12時を打ったところだったよ。」  
 母：「信じられないわ。嘘をついているんじゃない？」  
 子：「嘘なんかついてないよ！」  
 母：「寝ていて、どうして時計の音が聞けたの？」  
 子：「……………」

### 第17話：道路標識

先生：「小敏、どうして君は、毎朝遅刻して来るんだね？」  
 小敏：「毎回僕が走ってくると、学校の前の曲がり角のところ、道路標識が目に入ります。その標識には『学校——ゆっくり』って書いてあるので、そこからはゆっくり歩くからです。」

(翻訳：有為楠君代)

【会員短信】2012年春まで会員だった中根文子さんは、昨年満98歳になられたとのこと。2、3年前まで、新年会や料理講座にもご参加くださっていました。とてもお元気で、2011年の「夢広場」には、お一人でひょこっと顔を出されました。町田市三輪緑山にお住まいで、バスと電車を乗り継いでいらっしゃったそうでみんなをびっくりさせました。

「活動に参加するのは無理なので」と退会されたのですが、昨年秋の三輪緑山の文化祭には「書」を展示され、お元

気なお姿をお見せ下さったとのこと、三輪緑山にお住いの会員・寺西俊英さんが、中根さんの近況をお知らせくださいました。

中根文子 九十回忌誕生会  
 平政子 四年十月四日  
 九八回忌誕生会  
 中根文子 九十回忌誕生会  
 子文根中  
 孝雅帯夕  
 冷玲正交  
 堂瑞法歡  
 松石百琵琶  
 頼火眉瑟  
 満時着行

富永皆空

自筆の書(上の写真)と展示された書の前立つ中根文子さん



## 《'わんりい' 掲示板》

### ◆わんりいの催し

## ボイストレーニングをして 日本の歌を美しく歌おう! Vol.6

ボイストレーニングをして、日本人が長い間、親しんだ童謡や抒情歌などの愛唱歌を気持ちよく歌いましょう。

- ◆動きやすい服装でご参加ください
- ▲月日：2013年1月29日(火)と2月26日(火)
- ▲時間：10:15 ~ 11:45
- ▲場所：まちだ中央公民館・6F 視聴覚室
- ▲練習予定歌：1月「銀色の道」  
2月「冬の夜」
- ▲講師：Emme(歌手)

東京芸術大学邦楽科長唄別科卒業。日本の伝統音楽・長唄の素養をバックにした、たおやかなオリエンタルヴォイスの独自の歌のスタイルを誕生させている。

- ▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- ▲定員：15名(原則として)
- 申込み：わんりい ☎042-734-5100  
E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp

## Emm CD「大人の子守唄」 発売記念ライブ

2013年2月3日(日) 13:00開演(12:30開場)

- 場所：吉祥寺スターパインズカフェ  
http://www.mandala.gr.jp/spc.html  
武蔵野市吉祥寺本町1-20-16  
☎0422-23-2251

演奏のメンバー：

久保太郎(Gt.) / 大石智紀(Per.)  
小濱明人(尺八) 松本MOCO(Acc.他)  
山本亜美(十七絃箏)

- 参加費：3600円+1ドリンク
- 問合&申込：☎080-3494-5802 (Emme)  
E-mail: info@emmevoice.com



### 【'わんりい' の原稿を募集しています】

「わんりい」は、主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞いた面白い話などを気軽にお寄せ下さい。

活動についてのご希望やご意見及び掲載の記事などについても、簡単な感想をお待ちしています。

恒例! 'わんりい' 新年会日取り決定!!

## !!! 2013 'わんりい' 新年会・シュワンヤンロウで新年を祝おう !!!

場所：麻生市民館・料理室(小田急線・新百合ヶ丘下車北口3分麻生総合庁舎内)

2012年2月10日(日) 11:00～14:00



- 定員：先着40名 ('わんりい' 会員と関係者のみ。お早めにお申込下さい)
- 参加費：1500円 (会場費 シュワンヤンロウ材料及び福引景品購入)
- 申込：メール：wanli@jcom.home.ne.jp TEL/FAX：042-734-5100

空飛ぶ芸術☆

### 山東省濰坊(イボウ)凧の世界展 <http://www.jcfc.or.jp/blog/archives/2977>

～凧好き集合! 身の回りのものが総て凧になる!!

山東省の中でも最も有名な濰坊(イボウ)市の凧約120点を展示～

- ◆ 会場：日中友好会館美術館
- ◆ 2013年2月1日(金)～2月24日(日)
- 10:00～17:00 ◆ 入場無料(水曜日休館)

#### ● [関連イベント]

山東省濰坊市から来日する凧職人 孫継和氏による凧揚げ実演・凧揚げ体験

- ◆ 2013年2月2日(土) 14:00～15:30(予定) ◆ 参加無料、予約不要。
- ◆ 横浜海の公園、浜辺にて 現地集合・解散(雨天中止)  
(横浜市金沢区、金沢シーサイドライン「海の公園柴口」下車)
- ◆ 参加者の凧揚げ体験も予定しています。凧の貸出し有り(要予約)。

◆ 問合せ：日中友好会館文化事業部 ☎03-3815-5085 / FAX：03-3811-5263

▲主催：(公財)日中友好会館 ▲後援：中国大使館 他

※都合により展覧会を中止・変更する場合がございますので、必ず事前にご確認の上ご来場ください。



### 『ミツバチの羽音と地球の回転』上映 & シンポジウム 「ポスト原発時代を生きる～上関・祝島の現場から～」

[http://www.wako.ac.jp/what\\_new/2012/2012-1123-1555-59.html](http://www.wako.ac.jp/what_new/2012/2012-1123-1555-59.html)

非暴力的手段で原発計画を「凍結」させた祝島。その存在は映画『ミツバチの羽音と地球の回転』がイキイキと教えてくれました。『ミツバチ』の上映と監督のトーク、映画に登場する上関・祝島の活動メンバーからの現場報告

- 2013年1月12日(土) 13:00～18:00
- 13:00～15:15  
上映会『ミツバチの羽音と地球の回転』(監督・鎌仲ひとみ)
- 15:35～18:00  
シンポジウム「ポスト原発時代を生きる」
- 和光大学E棟101教室
- 事前申し込み不要 入場無料(カンパのご協力を)
- ◆ 問合せ：学術振興係 ☎044-989-7497  
メール：shinkou@wako.ac.jp

中国を知る会1月例会「中国最新事情」(詳細12月号)

- 日時：1月21日(月) 18:10～20:00
- 場所：町田中央公民館 視聴覚室(定員36名)
- 参加費：無料\* 20:10～懇親会/徳樹庵(希望者)  
\* 懇親会参加者は別途3000円(飲み物代込)
- ◆ 申込 Email:m-tokoro@mta.biglobe.ne.jp 床呂

#### ◆ わんりいの催し

### 第16回 中国語で読む・漢詩の会

よく知られている漢詩を、中国語の音とリズムで楽しもう!  
正しい発音で読めるように練習しよう! 漢詩の時代的背景や詩に描かれている情景を知って漢詩を一層楽しもう!

- ▲ 場所：1月会場＝まちだ中央公民館・視聴覚室  
2月会場＝町田市民フォーラム・4F、第二学習室A  
1月と2月で会場が異なります。
- ▲ 月日：1月の講座→2013年1月13日(日)  
2月の講座→2013年2月17日(日)
- ▲ 時間：10:00～11:30
- ▲ 講師：植田渥雄先生(現桜美林大学孔子学院講師)
- ▲ 会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- ▲ 定員：20名(原則として)  
\* 録音機をお持ちの方はご持参下さい。
- ◆ 申込み：☎050-1531-8622(わんりい)  
E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp

#### 【1月の定例会】

- ◆ 定例会：1月25日(金) 13:30～(田井宅)  
\* 2月号のおたよりの発行はありません。  
2月は新年会でお会いしましょう!